

# 文学部

## 文学部生のリアルな学生生活

Vol.37

文学部生のリアルな学生生活の様子を掲載し、ご父母の皆さまに文学部生の充実したキャンパスライフの風景、また文学部ならではの取り組み等の情報を発信いたします。

# 自身の関心と しっかり向き合い 学ぶ大学生活

文学部人文社会科学科教育学専攻4年  
私立中央大学附属横浜高等学校(神奈川県)出身

さいとう 希帆

「こんなにも胸躍る学びがあるということとを、どうして誰も教えてくれなかったのだろう」。高校3年生の私が手にしたその本は、知的好奇心をひどくかき立て、教育学を学びたいという意欲を確固たるものにした。

教育学専攻に推薦が決まった附属生は、大学入学前に提出すべきレポートがある。指定された複数の課題図書うちの1冊に目を付けた私は、どうしてもそれを購入という形で手にしたいと思った。結果的に、唯一オンライン上で在庫があると表示されていた北海道の書店からその本を取り寄せたのだが、これがとても面白かった。本を読むという習慣だけでなく、専門用語に関する知識がなかったために読了までにはかなりの時間を要したが、その時間さえも一瞬だったと感じられるほど、私はその本に魅了された。

大学生活において私が入学時より重要視していたこと、そして、重要視してよかつ

たと感じていることは「自身の関心として向き合うこと」だ。私にとって高校までの学びにおいては、「どうしてそれがそうなるのかも」と知りたいという思いと「しかし、そんなことをしていたら勉強が先に進まなくなる」という2つの選択肢の間での葛藤があった。

「先に進まない」という選択肢は、成績が落ちること(附属生にとっては死活問題)を意味していたため、当然避けるべき選択肢であった。一方、「もっと知りたい」という選択肢は、興味のある科目であればあるほど無視することは困難であった。「すべて終わらせてからもうと知ればいい、それは単に要領が悪いだけだ」という声があるならばそれは否めないが、要領が悪いから……と自分に言い聞かせることには嫌気がさしていた。

だからこそ、自身の関心にしっかりと向き合い追究することができる大学生活は、私にとって幸せにはかならない。以下では、

今までの大学生活において特に印象に残っており、自身の関心と向き合うことができたと感じられた教育学専攻に開かれている授業外の2つの学びの場、そして、FLP中川康弘ゼミについて述べたい。

はじめに挙げるのは、サブゼミと呼ばれる専攻内に開かれたサークルだ。サブゼミ内には全部で9つの団体があり、私が所属しているのは「特別支援教育分科会(通称・特支)」と呼ばれる団体。特支は「個々のニーズに合わせた教育について扱うゼミ」として活動しており、所属するゼミ員の関心は多岐にわたる。過去には、イン



FLP中川ゼミでベトナムのフエを訪問。フエ大学の学生と



クルーシブ教育、ユニバーサルデザイン教育、障害と防災についての関連性、発達障害とキャリアの関連等について互いに学び合ってきた。そんな中でも私が関心を持ったのは、精神的な疾患、たとえば鬱やパニック障害と学校教育の関連性だ。それが一般の特別支援教育の解釈と異なっていることは承知しているが、自身の経験からこれを見直そうことはできなかった。現在も学部での学びを参考にしつつ、「学校制度との衝突」をはじめとする結論を模索中だ。

また、毎年度末にはサブゼミ全体で定例会(成果報告会)が行われる。2019年度は1年生から4年生までの100名近くが参加。約1週間(宿舎で)苦楽を共にする(発表練習や資料の作成に追われ、徹夜組・レッドブル大量摂取組が発生することは珍しいことではない)という魅力的な行事だ。ほかのゼミが時間をかけて作った発表を聞くことができるため、自身の関心の芽を見つける良い機会になっている。

サブゼミに興味を持たれた教育学専攻の方がいらっしゃいましたらこちらまで。  
a19.m3pt@g.chuo-u.ac.jp (コジマ)



池田ゼミの木下川フィールドワークにて。  
右奥は皮をなめすタイコ。左はなめされた皮

次に挙げるのが、「池田ゼミ（読書会）」と呼ばれる自主的な勉強会だ。これは、専攻の池田先生のもとに自然に集まった学生によって運営されてきたもので、「人権」をキーにして気になった本について意見交換を行う勉強会である。とはいえ、脱線して身の回りのことや社会情勢等の話をすることも多く、これがなにより面白い。この話し合いをすることで、本の中で述べられている抽象的な概念を具体化させる過程や、それが日常生活を与えている影響などがよくわかる。また、みんなでフィールドワーク（皮なめし工場など）に出掛けることもあり、体験を通して学ぶという経験ができる点も貴重だ。この会によって、自身の関心の広がりを実感でき、「普通」を見直すきっかけにもなっている。

最後に、FLPの国際協力プログラム中川康弘ゼミについて述べる。このゼミでは、「日本語教育とそこから考えられる多文化共生」について学ぶことができる。先生から毎回多くの新しい情報をいただけるので、メモを取る手が止まらないという事態が発生しがちだが、学年や学部の枠を越えて学び合うことができる環境はとても楽しく、大事な場所であると感じる。また、



池田ゼミの春合宿

私は「日本語教育」という部分に惹かれ1年次にこのゼミへの応募を決めたが、「多文化共生」についても多く触れることで「日本語教育」を俯瞰する視点や、その見方についても学んでいる。

私がこのゼミで得た最も大きなものは、「弱者にとつての理不尽に気付かなくても平穩に暮らすことができる特権」への気付きだ。今年度末に執筆する予定のゼミ論文では、このことについて調査し、理解を深めたいと思っている。

私は、このような環境で学べることを本当に幸せに思う。大学生でいられる期間に残りわずかとなってしまったが、このような環境を用意してくれたすべての方への感謝の気持ちを胸に、4年間の学修を終えたい。

\*12020年度について全体としての開催はなかった。掲載写真は全て2019年度のものである。

## 文学部だより

### ご挨拶

文学部事務室 ますだ ようすけ 益田 陽介

ご父母の皆さま、はじめまして。2021年7月付で文学部事務室に異動してまいりました益田陽介と申します。今回は貴重な誌面をお借りしてご挨拶申し上げる機会をいただき、誠にありがとうございます。

私はこれまで人事部人事課にて、主に学校法人中央大学で雇用している職員関係の勤怠管理、給与処理、社会保険や税務関係の仕事に従事しておりました。これからは教育という面で学生の皆さんが有意義な学生生活を送れるように日々努力していきたいと思っております。

文学部事務室に着任後、現在私が担当している「学籍業務」という業務に従事していく中で、自分自身の学生時代を思い返すことが増えました。

「退学」「除籍」「休学」という一つひとつの言葉だけ見ると、軽く感じられるかもしれませんが、ご子女がその現

実に向き合うときがあるとすれば、それはご子女にとって非常に重要で人生が大きく変わってしまう出来事に直面しているときだと言えます。

私自身も本学在学中に、退学と再入学を経験しました。今思えば、自分自身の人生の中で大きな決断だったと思います。しかし、私自身の体験で言うと、退学までして自分の挑戦してみたかった世界で過ごした時間は、結果的に人生で代え難いものになりました。

ほかの学生よりも卒業までに時間がかかってしまいましたがたくさんの方々に支えられて学生生活を送ることができました。

だからこそ、ご父母の皆さまやご子女の大切な人生の時間を預かっているという気持ちを忘れずに、業務に取り組んでいきたいと思っております。

